

那須与一伝承館通信〈第10回〉

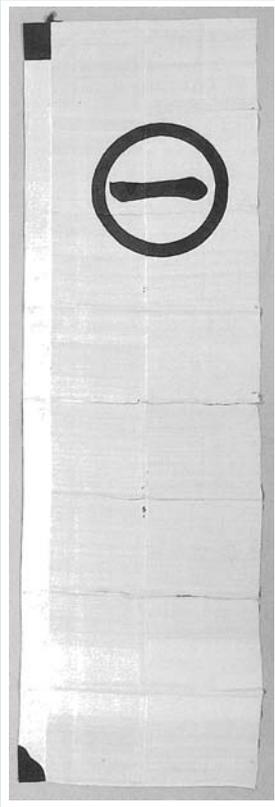
〇丸二一文字旗

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、丸二一文字旗を紹介いたします。

この旗の由来については、詳しくわかりませんが、おそらく江戸時代に那須家が用いた軍旗の一つではないかとみられます。旗の寸法は縦259・7センチメートル、横81・2センチメートルで、白絹を用いた幟です。

幟は細長い布の端につけた輪に竿を通して、立てて標識とするもので、軍陣・祭礼・儀式などに用いられました。

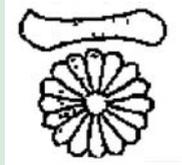
旗の真ん中には、「丸二一文字」という紋がしるされています。これは那須家の家紋で、「一は「かつ」と読むことから、戦いに「勝つ」という意味を込めて採用したものと



丸二一文字旗(那須家所蔵)



《参考》丸二一文字



《参考》一菊ノ紋
 (『萬世武鑑』より)

■問い合わせ

那須与一伝承館

TEL (20) 0220

推測されます。

また那須家では、菊花紋を組み合わせた「一菊ノ紋」という紋も併用していました。

那須与一伝承館では、この旗を展示しております。ぜひ本物の幟の大きさ、迫力を体感してください。

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 21

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

ふれあいの丘芝生広場の北側にある大工房とシャトー・エスポワールをつなぐ上り坂の中腹あたりにこの彫刻は立っています。



Eternal Cradle -再生-
 しばやま きょうこ
 柴山 京子 1999年

釣鐘を逆さにしたようなこの作品には、表面にいくつもの突起があり、下の方には東西に向けて貫通した四角い穴があります。南米ペルーのチチカカ湖付近にある墓の遺跡を模して造ったといえます。突起部分は石の移動などの際に必要なもので、墓として完成すれば切り取られるも

の。四角い穴は、東に向けることで太陽のエネルギーを取り込み、再生を願うためのものだそうです。突起が残されたのは「墓としては未完成—まだ実用ではない—」という意味が込められています。

Eternal Cradle (エターナル クレイドル) とは「永遠のゆりかご」という意味。この作品を昇る太陽や沈む太陽とともに眺めて、毎日生まれ変わるような気分、再生の感覚を味わってほしいと作者は願っています。

作者は、1972年神奈川県生まれの柴山京子さん。東京造形大学彫刻研究室を修了し、1998年に国画会展新人賞を受賞。韓国やペルーの国際彫刻シンポジウムに参加後、本市のシンポジウムに参加。その後も個展や国展への出品など精力的に活動中です。国画会会員。



柴山京子さん

設置場所案内図(★印)



■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718